

テーマ展「一時の記念日100周年記念－「時」展覧会2020」の概要について

岩 村 和 政

The report of the exhibition “ Time Exhibition 2020”

Kazumasa IWAMURA

山口県立山口博物館研究報告

第47号(2021年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.47(March 2021)

テーマ展「一時の記念日100周年記念－「時」展覧会2020」の概要について

岩村 和政¹⁾

The report of the exhibition “Time Exhibition 2020”

Kazumasa IWAMURA¹⁾

Abstract

June 10th is “Toki no kinenbi”, anniversary of Time. It is derived from the story that Emperor Tenji first announced the time by using water clock called rōkoku on that day in 671. The anniversary was set in 1920, when the Time Exhibition was held at the Tokyo Education Museum (now the National Museum of Nature and Science), and is the 100th anniversary this year.

1 はじめに

6月10日は時の記念日である。1920年に東京教育博物館（独立行政法人国立科学博物館の前身）において、国民に時間を意識して生活するよう促すため、「時」展覧会が開催された。この展覧会が大盛況であったことが契機となり、会期中に6月10日を「時の記念日」とすることが提案され実現した〔1〕。時報の最も古い記録は、日本書紀に天智天皇が天智天皇十年四月二十五日に漏刻を設置し、鐘や太鼓を鳴らして時を知らせたことが記されている〔2〕。この日を現在の暦、グレゴリオ暦に直すと671年6月10日になり、「時の記念日」はこの故事に由来している。時の記念日の制定は、日本人の時間意識の変化に大きな影響を与えたことでも知られている〔3〕。時の記念日の催しは各地で行われ、現代の時間に正確といわれる日本人の時間意識の礎をつくったと考えられる。

本テーマ展では、明石市立天文科学館より資料をご提供いただいた100年前の「時」展覧会の資料写真、時の記念日までの時間意識、山口博物館の時や暦に関する資料、時計の歴史や技術の進歩に関する資料を展示した。展示をとおして「時」や「暦」が天文分野と深いかわりのあることを知っていただきたいという目的で開催した。その概要を報告する。

2 会期・場所

山口県立山口博物館の3階特別展示室で、2020年6月5日(金)～6月21日(日)の期間開催する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により会期の日程を見直し、7月12日(日)まで延長して開催した。のべ33日間開催した。

1) 山口県立山口博物館（天文）

3 展示内容

総合博物館である山口博物館には、天文分野だけでなく歴史分野や理工分野にも暦や時計などの資料がある。これら実物資料と組み合わせて時の記念日にまつわるエピソードや時計の技術の進歩について、天文と生活との関わりを紹介した。会場入口には、江戸時代末期の萩城で使われ、当館で修復された檜時計が人目を引いた(図1)〔4〕〔5〕。出品した資料の目録を表1に示す。

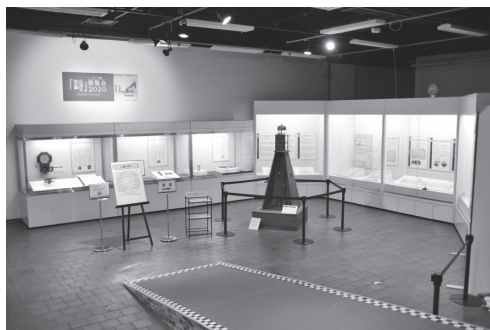


図1 会場の様子

表1 出品目録

展示資料(実物)	所蔵
萩城の大やぐら時計	山口博物館
伊勢暦 安政7年(1860)版	山口博物館
明治6年太陽暦	山口博物館
改暦弁(福沢諭吉著)	山口博物館
正午器	山口博物館(毛利家旧蔵)
砂時計	山口博物館(毛利家旧蔵)
尺時計	山口博物館(周布家旧蔵)
掛時計(日本、SEIKOSHA(精工舎)製)	山口博物館
六分儀(イギリス、Heath社製)	山口博物館
展示資料(写真)	所蔵
近江神宮の漏刻(水時計)模型	山口博物館
太宰府の月山(大宰府の漏刻台跡)	山口博物館
「行程記」山陽道登り一、山口部分	山口県文書館
誌上時展覧会表紙 (南光社発行「教材集録 臨時号、誌上時展覧会」)	提供: 明石市立天文科学館
100年前の「時の記念日」に配布されたビラ	提供: 明石市立天文科学館
1920年の「時」展覧会展示資料 昔と今の「時」の呼び方の比較	提供: 明石市立天文科学館
1920年の「時」展覧会展示資料 東京出発後五時間経過毎の列車到達地点	提供: 明石市立天文科学館
1920年の「時」展覧会展示資料 児童教師の一日の生活	提供: 明石市立天文科学館
1920年の「時」展覧会展示資料 一秒時に物の動く速さ	提供: 明石市立天文科学館

(1) 「時」展覧会までの暮らしと時間について

日本では古くより日時計や漏刻(図2)〔6〕などを使っていたが、管理や精度の問題があった。その後、西洋で誕生した機械式時計がもたらされる。日本で最も古い機械時計の記録は、1551年フランスコ・ザビエルが山口の大内義隆へ贈物をしたものと考えられる〔7〕。これ以降、管理がしやすく優秀な機械式時計に代わったと考えられる。

江戸時代までの時刻制度は夜明けと日暮れを基準とする「不定時法」で、主に領主たちによって管理されていた〔8〕。昼夜を通して時刻を城の鐘、寺の鐘などの「時の鐘」で知ら



図2 近江神宮の漏刻(水時計)模型

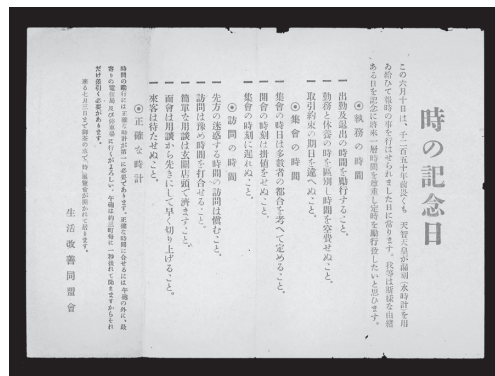


図3 100年前の「時の記念日」に配布されたビラの写真(提供: 明石市立天文科学館)

しずつ変わり始めた [3]。1920年、生活改善同盟会の援助により、5月16日から7月4日まで東京教育博物館で「時」展覧会が開催され、連日大盛況となり約22万人が来場した。会期中に制定された第一回「時の記念日」では、東京各所で時間を大切に呼びかけが行われ、正午の時報に合わせて大砲や寺院の鐘が一斉に鳴った。「時の記念日」は、多くの人に「秒」を意識させ、日本人の時間への意識にも影響を与えたと考えられる。この時配布されたビラや展示された資料の写真を展示した (図3)。

(2) 暦と時計の技術の進歩について

暦は、農耕文明の発達によって、食料を計画的に生産・収穫をするために生まれた。エジプトでは紀元前3000年頃、太陽暦であるエジプト暦を作り、1年を365日として種まき・収穫時期などを管理していた。エジプト暦をもとに暦のずれを補正したユリウス暦やグレゴリオ暦がつくれ現在に至る。日本では1872年(明治5年)まで太陰太陽暦(旧暦)が使われ、太陰暦の1年354日と太陽暦の1年365日の日数の違いを考慮して、太陰暦に「閏月」を加えることで1年の長さを調整していた。展示をおこなった伊勢暦に当時の閏月や月食の予報を見ることができる(図4)。

古代から20世紀半ばまで、天文学者は太陽や月や星の動きを調べることで、正確な暦を作り、正確な時刻を決めてきた。「時」は天文学と深く関わっているのである。また、正確な時刻を使い、正確な天体の位置を測定することができると、地球上の自分の位置(緯度や経度)を知ることができる。15世紀に入り大航海時代を迎えると、航海者は安全に目的地にたどり着くために、自分の位置を正確に知る必要があったため、揺れに強く正確に時を刻む時計と船上で天体の位置を正確に測る六分儀が発展した。時計の技術的な進歩を年表形式で示し、当館所蔵の砂時計・正午器(毛利家旧蔵)、尺時計(周布家旧蔵)、八角掛時計(明治、精工舎製)、六分儀(Heath社製)などを展示した [10]。

(3) 正確な時が支える現代社会

日本の時計産業は、時間の正確さと携帯性の向上を限りなく求め続け、世界をリードし

ている。また、精確な時計を作る技術が現在の日本の産業の礎となり、精確な日本の標準時が我われの生活を支えていることを身近な例を挙げて示した。原子時計の精度を伝える電波時計、原子時計が人工衛星に積まれて1億分の1秒以上の精度で制御され、カーナビゲーションやスマートフォンの位置情報が成り立っていること、電波望遠鏡ではもっと精密な100億分の1秒以上の精度で地球と宇宙を測り、地球上の2地点の距離をcmの精度で測量したり、遠くの星の細部を見分けたりしていることをイラストで示した。



図4 不定時法の解説と伊勢暦

おわりに

コロナ禍で休館する博物館が多い中、会期を延長して開催することができた。移動の自粛によりご来館いただけない方のために、当館ホームページ上に「バーチャル博物館（ミュージアム）」を立ち上げ、会場の360度映像、ビデオ映像、パネルや資料の写真を掲載し、来館した雰囲気を感じてもらえる新しい取り組みもはじめた。また、第一回「時の記念日」の日にお生まれになった県内在住の100歳の方が期間中にご来館され、大変喜ばれたことが明るい出来事となった。振り子時計など古い時計を見たことのない方は、時計に興味を持ってもらい、「時」や「暦」について学んでいただけた。これらのことから、テーマ展の目的を達成することができたと思われる。展示にあたり、ご協力いただきました明石市立天文科学館館長井上毅氏をはじめ、ご協力いただいた関係の皆様には厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- [1]井上毅.2020.「時の記念日」誕生秘話.月刊星ナビ2020年6月号.p50-55
- [2]坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注.1995.日本書紀(五).岩波文庫
- [3]井上毅.2019.時の記念日のおはなし.明石市立天文科学館
- [4]山口県立山口博物館.1980.古時計の修復について.山口県立山口博物館研究報告第6号.
- [5]山口県立山口博物館.1981.山口県内の和時計調査.山口県立山口博物館研究報告第7号.
- [6]山口県立山口博物館.2006.日本の天文史跡目録.山口県立山口博物館研究報告第32号.
- [7]広瀬秀雄.1993.暦.東京堂出版
- [8]萩市史編纂委員会.1983.萩市史第一巻
- [9]山田稔.2009「近世街道絵図「行程記」の路線図について」.山口県文書館研究紀要第36号
- [10]山口県立山口博物館.2003.山口博物館収蔵の天文学史関連資料 I 資料紹介.山口県立山口博物館研究報告第29号.